

見る場合、外因による影響よりも、その歴史世界に内在する伝統的な思想に注目すべきである、というわけである。

五四運動の革新的な面に目を向けがちな人々の視点を窺えようとする見解は、確かに興味深いものであるけれども、私はやはり五四運動の革新性に、より重要性を認めるものである。(A五判、九二頁、香港大学中文学会、一九七九年)

R・ロッシェ編

インドとインド学

—W・ノーマン・ブラウン博士論文選集—

前田 専学

インド学の権威としてアメリカのインド学界を代表し、世界的にも著名であった、ペンシルヴァニア大学の、故・ノーマン・ブラウン博士が来日されたのは、今から十年前のことであった。当時の東洋文庫長故辻直四郎博士のお骨折で、日本学術振興会の招聘を受け、一九六九年二月二六日羽田空港に着、同二十八日東洋文庫閲覧室において、『The Power of Truth in Ancient Indian Belief』(後、著作 I、14 に組入れられた)と題して講演された。その博士は今はない。一九七五年四月二十二日インド研究の領域で不滅の業績を残して他

界された。

ここに取あげる *India and Indology* は、ブラウン博士の小論文の選集である。博士の大きな功績の一つに American Institute of Indian Studies の設立(一九六一)があるが、一九七一年に十年間にわたる President の職を辞されるに当って、同研究所の理事会で、博士の貢献に対する最も有益で恒久的な謝意の表現として、インドで博士の学術論文集を出版することが決定され、ペンシルヴァニア大学の Rosane Rother 博士にその編集が依頼されたのである。しかし本論文集が出版されたのは一九七八年であり、ついにあの柔らかな笑顔でこれを御覧になることが出来なかったのはまことに遺憾の極みである。

本書は、博士の引退後、同研究所長となった Ainslie T. Embree 教授の『Foreword』の後、長い間、博士の同僚であったインドの卓れた学者四名の手に成る『Preface』が続いている。即ち、R.N. Dandekar 教授、故 V. Raghavan 博士、Moti Chandra 博士、および故 Suniti Kumar Chatterji 教授が、それぞれの専門の領域に対するブラウン博士の貢献を評価し、その功績を讃えている。

これは欧米の学者の論文集としては正しく異例の事である。ブラウン博士の父 George William Brown 博士は、宣教師としてインドに赴き、のち帰米して、ブラウン博士と同

じへ Johns Hopkins 大学の Bloomfield 教授の許で学位を得、サンスクリットとヒンディーの学者となった方である。ブラウン博士はその父と共に、八歳から十三歳までの少年期をインドに過し、自らもサンスクリット学者となり、アメリカの大学は勿論、マドラス大学等のインドの諸大学からも名誉学位を与えられ、終生インドを愛し、インドのよき理解者であり続けたブラウン博士の論文集ならではの感がある。

“Preface”で続く“Biographical sketch”, “Biography of W. Norman Brown's writings”, 及び “Editorial note”を内容とする編集者 Rosane Rocher 博士の “Editor's Introduction”がある。その中 “Biographical sketch”は、編集者が直接ブラウン博士から聞いた回顧談と、曾って出版された諸資料とをもとにして執筆された草稿に、ちひななラウン博士夫人および博士の旧友の一人 Holden Furber、ベンシルヴァニア大学名誉教授の目を通してあり、博士の最も信頼出来る伝記となっている。

ブラウン博士の著作目録としては、博士の直弟子の一人 Ernst Bender 教授の編纂であるものが、博士の記念論文集 (*Indological Studies in Honor of W. Norman Brown*, Ed. by E. Bender. (American Oriental Series, vol. 47, 1962)) に付されている。しかし本論文集の “Bibliography of

W. Norman Brown's Writings”はそれを改訂増補したもので、一九七六年の時点のものまで収録し、それらを出版年次順に配列している。

“Editorial note”では、本論文集作成のための編集方針を叙述する。多数の博士の著作から、学術論文に限定し、書評を除外するなどして、結局、本論文集には、「ヴェーダと宗教」「物語と民話」「美術」「文献学」に分類出来る論文が選ばれたと説明している。

このようにして、全部で三十五点の論文が、上記の四群に分類され、各群内では、主として出版年次と内容を考慮して、以下のように配列されている。

Part I. Veda and Religion

1. Proselyting the Asuras: A Note on Rg Veda 10.124
[=JAOS 39 (1919), pp. 100-103]

—— RV 10.124はインドラ神と悪魔ヴァトリとの個的な争いではなく、神 (Deva) 族とアスラ (Asura) 族との全面衝突に関係しているとの立場からする、同讃歌の新解釈の試み。

2. The Sources and Nature of *purusa* in the Purusa-sūkta (Rg Veda 10.90) [=JAOS 51 (1931), pp. 108-118]

—— RVの有名なナムシヤ讃歌中のナムシヤ (Purusa) は宇宙を巨人と見做す原始的観念であるとする通説を否定。それ

はアムニ、スールヤ、ヴィシシュヌの諸神の特徴の混合体であるとの見解からして、同讃歌の新解釈を試み。

3. Some Notes on the Rain-charms (Rg Veda 7. 101-103) [= *New Indian Antiquary* 2 (1939), pp. 115-119]

——RV 7.101-103 の雨神、雲神、ハリヤの性格が、インドラ神のそれと同一化されたこと、詠の認識に立ったことからの讃歌の新解釈の試み。

4. The Rigvedic Equivalent for Hell [= *JAOS* 61(1941), pp. 76-80]

——RV を Atharvaveda とは地獄の記述は始るとはならず。RV 7. 104 以下の RV の “地獄”に相当するもの、の本質と概念を総括する。

5. The Creation Myth of the Rg Veda [= *JAOS* 62 (1942), pp. 85-98]

——RV 中に散在する前時の宇宙観への言及を出来る限り収集し、RV の宇宙開闢説を再構成したものである。

6. King Trasadasyu as a Divine Incarnation. A Note on Rg Veda 4.42 [= *C. Kanhra Raja Presentation Volume*, Madras: Adyar Library and Research Centre, 1946, pp. 38-43]

——RV 4.42 は、神々の主導権をめぐるインドラ・ヴァルナ闘争をテーマとする等の諸説を否定。自分はインドラ・ウ

ルナ両神の権化であるという、Trasadasyu 王の信念を記録してあるものとの立場から、同讃歌の新解釈を提示。

7. Indra's Infancy according to Rg Veda 4.18 [= *S. Verma Presentation Volume*, Hoshiarpur: Vishveshvarananda Vedic Research Institute, 1 (1950), pp. 131-136]

——インドラ神の出生と幼児時代を述べた RV 4.18 の全訳を示し、若干の問題点を解明。

8. Theories of Creation in the Rg Veda [= *JAOS* 85 (1965), pp. 23-34]

——上記論文の議論をあらたな発展をあげ、インドラ・ヴァルナ神話の「かの唯一物」(kad ekam, RV 10.129) に至るまでの RV に見られる宇宙創造の諸説を総括。附録として RV 2. 12, 10, 72; 10.81-82; 10. 90; 10, 121; 10. 125; 10.129 の英訳を付す。

9. Dirghatamas's Vision of Creation [= “Agni, Sun, Sacrifice, and Vāc: A Sacerdotal Ode by Dirghatamas (Rig Veda 1.164)”, *JAOS* 88 (1968), pp. 199-218]

——*asyá vānasya* 讃歌への知るべき RV 1.164 なる頌歌、難解な謎の歌である、などいわれてくる。本論文は同讃歌の意欲的な新解釈の試み。同讃歌はアグニ神、スールヤ神、祭式と語り、相互に密接に関連した三つの大テーマをも

——著者の Ph. D. 論文の一部。現代のインド民話とインドの文学作品との関係を検討し、ヒンドゥー教徒の民話とこれに対応する『ミンチャ・タントラ』にある物語を表し、その個々の関係を詳細に分析し、最後にインド民話研究史上初めて作成された「インド民話目録」を付す。

16. The Wandering Skull. New Light on Tantrakhya
29 [*American Journal of Philology* 40 (1919), pp. 423-430]

——*Tantrakhya* No. 29 の見出しの詩句の意味も、それに附随する物語も不詳であるが、Pandit Naresa の南インドの類話 G. D. Upreti の伝えるウッペーラヤ地方の類話 A. Dubois の集めた物語集中の類話を比較対照して、上記の不詳箇所新たな照明を当てる。

17. Escaping One's Fate. A Hindu Paradox and its Use as a Psychic Motif in Hindu Fiction [*Studies in Honor of Maurice Bloomfield*, New Haven, 1920, pp. 89-104]

——業 (karma) は、運命と受取られてゐるとは言へ、イスラム教の kismet とは根本的に異なり、人間は運命の主人であつて従僕ではない事を論じ、努力・知識・信愛等の、運命から逃れる種々の手段に言及して後、ヒンドゥー教徒の物語に例をとり、運命がいかにして避けられてゐるかを具体的に

示す。

18. Vyāghramāri, or the Lady Tiger-Killer. A Study of the Motif of Bluff in Hindu Fiction [*American Journal of Philology* 42 (1921), pp. 122-151]

——『鬚鬚七十話』中の機転のあく女性ヴァーヤーシマ・リーの話に見られるような「虚勢をなしておどす」(bluff) と云うモティーフの研究。第一に、このモティーフの種々の形式を特徴づけ、第二に、民話の場合には、それが文学作品からの借用であるか、独立のものであるかを決定しようとする。

19. The Tar-baby Story at Home [*Scientific Monthly* 15 (1922), pp. 227-233]

——アメリカ黒人の間に見られるタールビービー (Tar-baby) の話が、仏教のジャータカに見出されること、理由で、本来インド起源であること、Joseph Jacobs の語を採り、その起源はインドからであること、を論ずる。

20. The Stickfast Motif in the Tar-baby Story [*Twenty-fifth Anniversary Studies, Philadelphia Anthropological Society*, ed. by D.S. Davidson, Philadelphia, 1937, pp. 1-12]

——上掲論文19に対する反論を論駁したものの。

21. The Silence Wager Stories. Their Origin and their

Diffusion [= *American Journal of Philology* 43 (1922), pp. 289-317]

——「だんぢぢぢぢぢぢの語」(Silence Wager Stories) は、
 西の國に於ては、その母へ、即ち 500 A.D. 以前に、
 インドに成立し、それが、ついで他の國に流布したか、詳細は
 不明。

22. Change of Sex as a Hindu Story Motif [= *JAOS* 47 (1927), pp. 3-24]

——人間の間に見られる性の轉換(Change of Sex)の觀念が、
 西の國に於ては、信仰としての論議。

PART III. Art

23. Early Vaisnava Miniature Paintings from Western India [= *Eastern Art* 2 (1930), pp. 167-206]

——ホントに美術館所蔵の *Balagopalastuti* (『若くはトリミン
 ナの讃歌』)の紙写本(十五世紀)に画がかかれてゐる、西
 インドの、ヴェンシヤム系の説明画を、そのサンスクリットの
 テキストと共に、詳細に分析・論述したものの(巻末に図版の
 複製)。

24. A Jaina Manuscript from Gujarat Illustrated in Early Western Indian and Persian Styles [= *Arts Islamica* 4 (1937), pp. 154-173]

——「ブネン、ブネン、ブネン」の Dayā Vimalajī Bhandāra 所屬の
 ジャイナ教の作られた、ジャイナ教の *Kalpavṛta* の写
 本(十六世紀)に画かれた説明画の分析と解明(巻末に図版
 の複製)。

25. Stylistic Varieties of Early Western Indian Miniature Painting about 1400 A.D. [= *Journal of the Indian Society of Oriental Art* 5 (1937), pp. 2-12]

——一四〇〇年頃の初期インド説明画に見られる様式は、
 (A)の二種類を見出し、(A)は、A₁, A₂の区別があるとい
 へ、それぞれを分析・解明(巻末に図版の複製)。

26. A Manuscript of the Sthānāṅga Sūtra Illustrated in the Early Western Indian Style [= *New Indian Antiquary* 1 (1938), pp. 127-129]

——ホントに Robert Garrett 氏所有のジャイナ教白衣
 派に属する *Sthānāṅga Sūtra* の、説明画付き写本(十六
 世紀)を研究したものの(巻末に図版の複製)。

27. Some Early Rajasthanī Rāga Paintings [= *Journal of the Indian Society of Oriental Art* 16 (1948), pp. 1-10]

——初期ラージャスターン様式の画かれた、珍らしいラーガ
 (rāga)の説明画付き *Rāgamālā* (『ラーガの華鬘』)の写本
 (十七世紀)を分析・解明したものの(巻末に図版複製)。

28. A Painting of a Jaina Pilgrimage [= *Art and Thought Issued in Honour of Ananda K. Coomaraswamy on the Occasion of his 70th Birthday*]. London, 1947, pp. 69-72]

——ブロンクリン博物館所有の「西インドの布に画かれたジャイナ教徒の巡礼の絵(十八世紀初頭)」を分析・解明したものである(巻末に図版の複製)。

29. The Jaina Temple Room in the Metropolitan Museum of Art [= *Journal of the Indian Society of Oriental Art* 17 (1949), pp. 6-21]

——一五九四—一九六六年に「有福な一ジャイナ教徒がメソポタミアの古都バタンの「ホール・メソポタミア」のために建立した」現在メソポタミア・メソポタミア美術館にある寺院の研究(巻末に図版の複製)。

39. A Bronze Vessel from Central Asia. [= *Journal of the Indian Society of Oriental Art* 2 (1934), pp. 83-86]

——ハイデルフェイム美術館所蔵の青銅容器を A. K. Coomaraswamy が「An Indian Bronze Bowl」としたが「実はそれがトルキスタンの由来である」との意見を論証(巻末に図版の複製)。

Part IV. Philology

31. Some Lexical Material in Jaina Maharashtra Prakrit [= *Bharatiya Anusthan = Gaurishankar Hirachand Jijha Commemoration Volume*. Allahabad, 1934, pp. 27-32]

——ジャイナ・マハーラーシュトラー語に書かれた Viradevaganin の *Mahipala Caritra* の編纂・翻訳中に現れた多数の新語を「インド・マハーラーシュトラー」に記した。

32. Prakrit *vanadava* "Tree Sap, Self-control" [= *Language* 30 (1954), pp. 43-46]

——H. Jacobi の *Ausgewählte Erzählungen in Mahārāshtri* (Leipzig, 1886) に含まれる Bhamhadadatta 王の語の中に「vanadava」意味不明の語句(3, lines 17-18)の解題。

33. An Old Gujarati Text of the Kāṭaka Story [= *JAOS* 58 (1938), pp. 5-29]

——ジャイナ教の有名なカーカカ物語の「Old Gujarati」語に書かれた「ノーヴァーバド大学所蔵写本 No. 2008 *Kāṭaka-sūtrikāṭha*」のテキストに英訳とノートを付して発表した。

34. Some Postpositions Behaving as Prepositions in the Old Gujarati *Vasantavilāsa* [= *Indian Linguistics* 19 (1958), pp. 228-231]

——十四世紀の Old Gujarati 語の作品 *Vasantarilasa* において、後置詞が支配する名詞の前に来て前置詞として働く実例を八例挙げて、それらを分析。

35. The Indian Games of Pachisi. Chaupar. and Chausar
[= *Studies in Indian Linguistics: M. B. Emeneau Sanskrit Volume*. Poona, 1968, pp. 46-53]

——Pacsi, Caupara, Causara としつ知られるインドのゲームが米国でも行われていて、若干の学者の興味をひき研究された。本論文は、それらの研究の訂正と補足。

ブラウン博士の研究領域は極めて広いが、その研究活動の出発点はインドの物語と民話の研究であり、博士論文も(II, 15)『パンチャ・タントラ』と現代インド民話との関係を論究したものであった。

この民話関係の論文と共に、博士の著作活動の最初を飾っているのは『リグ・ヴェーダ』の研究(I, 1)である。民話に関しては最後まで関心をもっておられたとは言え、一九三九年以後は、一点の共著以外は、何ら独立した研究を発表されてない。それに反して、『リグ・ヴェーダ』に対しては驚歎すべき程の情熱を常にもち続け、終生、博士の最上の愛読書であったように思われる。晩年になって *asya vānasya* 讃歌を演習で取挙げ精魂を傾けてその解明に当られ、その成果

は I, 9 として発表された。その演習には五人のアメリカ人と一人のタイ人の外に二人の日本人が参加したが、その中の一人上岡弘二氏は最近発表した論文 “Rigveda 1 nā namate (RV 10.34.8)” (*Journal of Asian and African Studies*, No. 16, 1978, pp. 64-82) の脚注に “I wish to dedicate this series to the memory of Dr. W. Norman Brown who taught me, among all others, to love Rigveda” (p. 64) と書き記している。

インド美術、とくにテキストに添えられた説明画に対しては、非常に早くから——遅くとも一九二九年——興味を持ち、多くの研究を発表し、博士の著書は、しばしば、美しい図版によって飾られている。

博士の貢献は、この論文集に示された領域ばかりではなく、編集者の指摘のように、インドの歴史と政治の領域に対しても大きなものがある。博士は単なるサンسكريット学者に留めることはなく、常に現代インドの事情に関心を寄せ、その結果の一つは、American Historical Association の War-null 賞(1954)を受け、死の直前まで改訂の筆を続けた *The United States and India and Pakistan* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1953——一九七二年の第三版は Bangladesh を含む)である。これは米国の学生にとっては南アジアに対する最初の入門書となっている。博士が、古代研

寮中の American Oriental Society の President (1941-42) のみならず、現代研究中心の Association for Asian Studies の President (1960-61) のみならずは一九六七年 Ann Arbor で開かれた The 27th International Congress of Orientalists の President に選出されたので正しく著者のことであつた。博士の記念論文集 *Indological Studies* の編者として "It is even rarer for a scholar in Indic studies to leave his ivory tower of observation of the remote Hindu and Buddhist past and give close attention to the more recent centuries leading up to the emergence of modern India and Pakistan." (Preface) と述べた。

一九五八年〜一九六八年の十年間、親しく教を受けた評者ではあるが、あちこちに発表された論文のすべてにまで目を通すことは出来なかつた。今日では、すでに入手不可能の論文も多い。種々の大きな困難を克服し、このように美事に編集して、一般読者に提供された Rosane Rocher 博士に心からの謝意を表すものでもある。

India and Indology: Selected Articles by W. Norman Brown. Edited by Rosane Rocher. Published for the American Institute of Indian Studies. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978. 28.5×22cm, xxxvii+303+11V (Plates) pp. Rs. 190.

批評と紹介 小牧

シヤウル・ハンシュ著

イラン：カージャール朝下の君主制、官僚制、改革：一八五八—一八九六

小牧 昌平

本書の構成は次の通りである。

- 序文 (A. Hourani) ちえがき
- 第一章 初期のカージャール朝の改革者とその思想
- 第二章 Moshir od-Dowleh とその思想
- 第三章 内閣と委員会
- 第四章 安全のための模索
- 第五章 中央権力の崩壊
- 第六章 カージャール朝の改革者とその思想：最終局面

人物略伝、語彙集、史料についての覚え書き、文献目録、索引

本書が対象としている一八五八—一八九六年という年代は、カージャール朝 (1779—1924) の第四代皇帝ナーセルウッシャーハン・ナーサー Naser ad-Din Shah (在位 1848—96) の治世の後半に相当する。シャー治世の前半は Mirza Taqi Khan Amir Kabir (在職 1848—51) と Mirza Aqa Khan Nuri (在職 1851—58) との二人の宰相 (sadr-e a'zam)

第六十一巻 三七五